



階層秩序の維持と創出に関する人類学的研究- ミク ロネシア連邦ポーンペイ社会における首長制の事例 から -

著者	河野 正治
発行年	2017
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102甲第8001号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00147483

氏 名	河野 正治
学 位 の 種 類	博士（ 国際政治経済学 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 8001 号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	階層秩序の維持と創出に関する人類学的研究 ーミクロネシア連邦ポーンペイ社会における首長制の事例からー

主 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	関根 久雄
副 査	筑波大学 教 授	博士（文学）	前川 啓治
副 査	筑波大学 准教授	博士（文学）	鈴木 伸隆
副 査	宇都宮大学 教 授		柄木田 康之

論 文 の 要 旨

太平洋島嶼地域における一部の社会では、20 世紀後半期に植民地体制から独立した後も、首長制に基づく伝統的権威が、近代的政治的権威やキリスト教などの宗教的権威などと共に合法的権威として存続している。太平洋島嶼社会に関わる従来の人類学的首長制研究は、伝統的権威システムと西洋的統治システムとの歴史的葛藤による産物として現在の首長制を位置づける流れと、祭宴などの出来事において言葉や物がやりとりされる過程を解明する言語人類学的アプローチに大別される。しかし、前者においては首長が社会生活の中で人々からどのように見られ、いかに扱われているのかという微視的な次元におけるリアリティを明らかにしていない。後者においては、首長制に基づく秩序が作られていく具体的な過程を人々の相互行為から詳細に描いているものの、そこから得られた秩序を国民国家や市場経済などの現代的諸条件と結びつけてこなかった。つまり、上記 2 つの立場はいずれも太平洋島嶼社会における現代の政治的権威の姿を明示してきたとはいえない。

そこで本論文は、2 つの研究潮流を架橋する視座のもとで、現代太平洋島嶼社会における伝統的権威の存続について、ミクロネシア連邦ポーンペイ島社会における首長制を事例として取り上げ、ポスト植民地期の同島の社会条件下において伝統的首長を頂点とする階層秩序がいかに維持され、また創出されているのかを、伝統的祭宴など権威が可視化される機会の民族誌的記述を通じて明らかにすることを目的としている。

本論文は全体で次の 9 章で構成されている。

第1章 序論

第2章 歴史のなかの首長制と位階称号

第3章 村首長を「助ける」ー親族間の協働による伝統的権威の揺れ動き

第4章 「村の祭宴」を通じた集団の差異化と住民のつながり

第5章 最高首長に対する儀礼的貢納の時間性

第6章 最高首長への不満と「名誉の賭け」

第7章 多様な名誉を可視化する：称号の呼び上げという技法

第8章 礼節のポリテクス—複数の敬意表現と秩序形成

第9章 結論

第1章では、首長制に関する先行研究の検討から、首長と住民との対面的相互行為を通じた秩序の形成を外部の社会的諸条件との関係から論じる視点を提示している。筆者はそのための分析枠組みとしてアーヴィング・ゴッフマンとミッシェル・カロンのフレーム概念を取りあげる。ここでいうフレームとは、身の回りで生じた様々な出来事を理解するための認識上の枠組み（区分）である。筆者は、首長の権威や位階称号の名誉を実効的なものにする当事者間の人物評価に関わる諸要素とは無関係な要素がフレームの外部に排除されたり、元々外部に排除されていた要素がフレーム内部の要素と連関することで新たな人物評価が実践されたりする過程に注目している。

第2章では、過去2世紀におよぶキリスト教布教や諸外国からの統治といった西洋世界との接触を経て、ポンペイ島の首長制がどのように変化したのか、住民たちはその変化をどのような概念をもって理解したのかについて論じている。住民たちは、ドイツ統治時代(1899～1914)、アメリカ統治時代(1945～1986)に導入された近代的諸施策と向き合う過程で、首長を中心とする祭宴や首長から授与される位階称号によって構成される「慣習の側」と、政府機関や議会政治といった「政府の側」の2つに彼らの生活世界を区分して認識し、後者を首長制の外部にあるものとして位置づけるようになった。筆者は、現在のポンペイ住民がキリスト教の領域である「教会の側」を加えて3つの領域認識をもち、慣習の側としての首長制は他の2つを概念的に外部化しながらも、住民の実践行為や物財のやりとりが各「側」を横断して行われていることを指摘している。

第3章は、親族組織内での伝統的権威と一般住民との相互関係に関する事例提示の章である。具体的には村の首長であり、且つある親族組織の長でもあるベニートという男性に焦点をあて、親族の人々から権威を認められながらも文脈によっては認められないという、彼の権威の両義性に注目している。村社会では、首長が対外的に地位に見合う贈与を行う際、他の村人たちは贈与に必要な物財を村首長のために拠出して「助ける」のが通例である。しかし実際には、親族の長であるベニートを助ける内容や頻度には差があり、常に貢献するわけではないという。筆者はこのような事例をもとに、村首長や親族の長においても、その権威はその人物の地位に応じて自動的に規定されるわけではなく、状況ごとに現れることを指摘している。

第4章では、村首長を権威者とする「村」という集団に注目し、住民が帰属する村を他の社会的諸関係からどのように認識レベルで差異化しているのかを明らかにしている。住民たちは「村の祭宴」を通じて異質な社会的諸関係とつながると同時に差異化を行いながら、村をめぐる多様な境界づけや意味づけを行っていることを指摘している。

第5章では収穫と関連した儀礼的貢納を支える暦と実際の実施時期が異なるという民族誌的事実に着目し、最高首長に対する貢納儀礼のような首長制に基づく実践が、他の社会的諸実践の時間性と関係しあいながらも、絶えず人々によって修整されていることを示している。

第6章では、首長国の最高首長が儀礼的貢納を通じて私腹を肥やしていることに対して住民たちは不満を抱いているが、それでも多くの住民は最高首長に対する貢納をやめることはないという事実に着目している。儀礼において最高首長に貢納された収穫物の一部は、儀礼参加者に原則として称号の高い順に名前が呼び上げられ、再分配されることになっている。住民たちにとってそれは自らの社会的地位を明確に示す（可視化させる）機会であり、「名誉」を再確認することを意味する。筆者は、そのような機会は儀礼の場以外になく、それゆえに住民たちは旧来の最高首長による再分配型儀礼に積極的に参加していることを指摘する。

第7章では、住民たちが伝統的称号に込められた名誉に拘泥するのに反して、称号のもつ名誉とその序列が

しばしば乖離するという民族誌的事実に注目している。実際の儀礼においては、称号を尺度とした単一の価値基準に還元しえない多様な人物評価（個人に対する価値付け）が儀礼の場で行われており、名誉は、称号だけでなく、称号以外の行政や教会の役職や属性などにも開かれていることを指摘している。

第8章では、儀礼的手続きを通した名誉の可視化を、島や国籍を越えた外部者との政治的出会いにおいても行われていることを、同じミクロネシア連邦を構成する他島や近隣の島嶼国の伝統的首長によって行われる「太平洋諸島伝統的指導者評議会」の歓迎式典の様子を用いて例示している。

第9章では、第8章までの考察を踏まえ、ポスト植民地期のポーンペイ社会における首長制に基づく階層秩序が、首長制度の外部に存在する国家的文脈や市場経済的事情に基づく住民間の個別的な差異や関係性などと状況ごとに結びついたり切り離されたりすることによって、常に新たな人物評価軸を創出する可能性を抱えながら、動的に再編され続けていることを指摘して結論とした。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、現代太平洋島嶼社会においても重要な社会的機能を果たしている首長制と位階称号に基づく階層秩序の維持と創出の過程を、植民地統治やキリスト教布教、独立後の統治体制や市場経済、学校教育の浸透などの外的諸要因との相互関係において捉えた本格的な民族誌的研究である。延べ2年間に及ぶ長期のフィールドワーク（参与観察）によって得られた豊富な経験的データは、一次資料としての価値も極めて高い。特にポーンペイ島の社会秩序の維持において重要な意味をもつ首長による儀礼的祭宴及びそれに付随する物財の再分配行為を詳しく記述し検討した民族誌はこれまでになく、太平洋島嶼社会研究、現代社会における伝統的権威の存在様態に関する人類学的研究に大きく貢献するものである。結論において筆者が述べる首長制の現代的様相、すなわち首長制が、位階称号とそれに基づく名誉に付随した社会的価値を維持しながらも、近代性を背景とする異質で雑多な外的要素との絶え間ない結びつきと差異化のなかで個別の出来事ごとに柔軟に個人を価値づけることによって存続している、という指摘は、グローバル化する現代太平洋島嶼社会における政治的権威と島の住民との複雑な内面的葛藤に関する質の高い考察と資料を提示するものと言える。

さらに本論文は、対面的相互行為を理解するために、首長をめぐる再分配の諸事例に対してゴッフマンとカロンのフレーム概念を用いた動態分析モデルを適用し、その分析上の有効性を証明している。今後の課題として、このモデルの脆弱性を指摘し、新たな理論的方向性に関する考察を深めることを期待したい。そのことによって、本論文における民族誌的研究の価値はさらに高められるはずである。

2 最終試験

平成29年1月20日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。